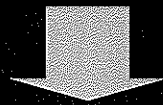


要支援者と要介護者(要介護Ⅰ) の実態調査

西尾老人保健施設
デイケア課リハビリ

目的

日頃より要支援者と要介護Ⅰのご利用者の要介護認定
に疑問を感じていた



要支援者と要介護Ⅰの差を明らかにし、それぞれに
対するアプローチ方法を検討していく

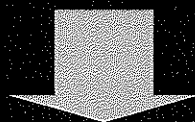
早瀬、村田

対象

要支援者(38名)、要介護 I (37名)
平均年齢(81.7歳)

評価内容

握力、下肢筋力(大腿四頭筋)、片足立ち保持時間、
重心動揺測定、歩行速度、老研式活動能力指標



身体能力に大きな違いはなく、活動能力のみに違いが
認められた

方法

対象

HDS-R21点以上

要支援者: 14名(平均年齢: 85.4歳)

要介護 I : 14名(平均年齢: 83.5歳)

評価内容

握力、10m歩行、TUG、
老研式活動能力指標

結果①

身体能力

	TUG	10m歩行	握力
要支援者(平均)	31.2秒	21.8秒	16.7kg
要介護 I (平均)	33秒	31.1秒	13.3kg
P値	0.76	0.20	0.14

※ $p < 0.05$

身体能力は有意差なし

結果②

老研式活動能力指標

	手段	知的	社会	合計
要支援者(平均)	1.9	2.7	2.2	6.9
要介護 I (平均)	1.4	2.7	1.6	5.7
P値	0.40	0.86	0.11	0.28

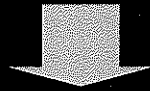
※ $p < 0.05$

活動能力も有意差なし

社会性は他の項目に比べ差が見られる

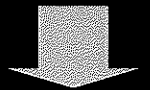
考察①

なぜ活動能力に有意差が認められなかったのか？



田口ら

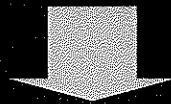
生理的老化現象による体力の減少や生活習慣の変化などの要因により、加齢とともに身体活動量は低下する



当デイケアの対象者は先行研究に比べ平均年齢が高いため有意差がでなかったと考えられる

考察②

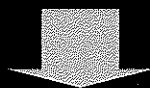
- ・身体能力に差はない
- ・活動能力(社会性)に差があった



身体能力を生活に使用するか否かの活動能力(社会性)によって介護認定に差が生じていると示唆される

今後の課題

活動能力(社会性)を維持・改善できるかが重要である



デイケアでの取り組み

- ・要支援者
活動量を維持させるため、飽きさせないプログラム作り
- ・要介護Ⅰ
目的意識を持ってリハビリに取り組む
リハビリプログラムで選択肢を持たせ、自主性を引き出す

参考文献

- 1) 奈良 勲, 鎌倉 矩子: 老年学, 第2版, 医学書院, 2005
- 2) 奈良 勲, 内山 靖: 図解 理学療法検査・測定ガイドブック, 第1版, 文光堂, 2006
- 3) 体力科学49: 加齢による下肢筋力の低下が歩行能力に及ぼす影響, 2000
- 4) 杉田 暉道, 栃久保 修: 統計学入門, 第6版, 医学書院, 1997